

〔論文〕

魅力ある道徳教育の推進

—体験活動を生かした道徳教育と
資料の特性を生かした道徳の時間の工夫—

俵 谷 好 一
Koichi Hyotani

大阪総合保育大学
児童保育学部

藤 田 善 正
Yoshimasa Fujita

大阪総合保育大学
児童保育学部

加 藤 博 之
Hiroyuki Kato

大阪市立扇町小学校

村 上 祐 副
Yusuke Murakami

大阪市立真田山小学校

要旨：本研究の目的は、教科化に応えられる道徳教育と道徳の時間の在り方やその関連性を探求することである。道徳教育推進のためには、道徳の時間と他の教育活動、とりわけ体験活動を関連付けた年間指導計画を立てることが必須である。その上で、道徳の時間をどのように位置づけるかが大切であり、関連図として示すことによって分かりやすくなり、また実用的である。

道徳の時間は、全教育活動で行われている道徳教育の「要」の役割をもつが、この役割を果たすためには、資料分析を深めるとともに、1時間の指導がどのように全教育活動で行われている道徳教育を補充・深化・統合しているのか、位置づけを明らかにすることが重要となる。また、資料のタイプによって有効な指導の在り方も異なるので、発問等様々な工夫をして授業を構築し、子どもにとって新たな発見のある道徳の時間にすることが求められる。

キーワード：道徳教育、道徳の時間、体験活動、家庭・地域との連携、教科化

I 魅力ある道徳教育の基本認識

1. はじめに

文部科学省は、平成26年10月に「平成25年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」⁹⁾の結果を発表した。小・中・高で暴力件数は、昨年度よりも3,509件増の59,345件となり、特に小学校の発生件数が過去最高となった。また、自殺した240人のうち、いじめが原因だったのは9人で、前年度よりも3人増えた。小学校の暴力件数の増加原因について都道府県教委のアンケートでは、「感情がコントロールできない児童が増え、ささいなことで暴力に至ってしまう事案が大幅に増加している。」「同じ学校で繰り返し暴力行為が発生したり、同じ児童が複数回数暴力行為に及んだりすることが多い。」という回答があった。

いじめの認知件数は、小・中・高・特別支援学校を合わせて185,860件で、前年度よりも減った一方、小・中学校の不登校は増加傾向にある。平成25年度の不登校児童生徒数は、119,617人であり、前年度より7,037人増加した。増えた理由としては、「人間関係をうまく構築できない。」

「無気力でなんとなく登校しない児童が増えている。」などの回答が都道府県教育委員会から寄せられている。

さて、平成23年10月11日に滋賀県大津市内の市立中学校の当時2年生の男子生徒が、いじめを苦に自宅で自殺するに至った事件は、事件前後の学校と教育委員会の隠蔽体質が発覚、問題視され、大きく報道された。⁵⁾ 本事件が誘因となって平成25年にはいじめ防止対策推進法が国会で可決された。⁷⁾ また、第2次安倍内閣における教育提言を行う私的諮問機関として平成25年1月に発足した教育再生実行会議では、翌月の2月26日の第1次提言「いじめの問題等への対応について」の提言⁶⁾が安倍首相に提出された。その提言要旨は、①道徳の教科化 ② いじめ対策の法制化 ③ 体罰根絶のための部活動指導ガイドラインの制定であった。道徳教育が正義感や規範意識の育成という意味でいじめの抑止力を育むのに資するのは確かであろうが、心豊かな人間性を育むといった本来の目的から矮小化させてはならない。

道徳教育の基本は、国際化、情報化などの知識基盤社会において主体的に何事にも対応し、自らの力で生きていくことができる心豊かな子どもの育成にある。つまり、

これからの新しい時代を切り拓いていく「生きる力」を育てることにあり、それは同時に、今日的な教育課題である子どもの心の問題、とりわけ、いじめや不登校問題の解決の糸口ともなろう。

2. 今、道徳教育が問われている

平成10年3月に「新しい時代を拓く心を育てるために―次世代を育てる心を失う危機」¹⁾の中で、子どもが身につけるべき「生きる力」の核となる心豊かな人間性とは、
・正義感や公正さを重んじる心
・生命を大切に、人権を尊重する心など基本的な倫理観
・他人を思いやる心や社会貢献の精神
・自立心、自己抑制力、責任感
・他者との共生や異質なもののへの寛容心
などの人間の感性や心であると述べている。

しかし、いじめや不登校問題の学校現場における今日の現状は、未だに厳しい状況にあることは、すでに「はじめに」で述べたとおりである。

平成26年10月21日、中央教育審議会は第94回総会を開き、道徳の教科化などが盛り込まれた「道徳に係る教育課程の改善策等について」の答申案が出された。答申は、1 道徳教育の改善の方向性 2 道徳に係る教育課程の改善 3 その他の改善が求められる事項の3点が柱。内容については、1では、道徳の使命が明記されており、教育の目的として、人格の完成を目指すとした。加えて、学校における道徳教育は、児童生徒一人ひとりが将来に対する夢や希望、自らの人生や未来を切り開いていく力を育む源でなければならない、などと道徳のあり方について言及した。2については、道徳の時間を「特別の教科 道徳」(仮称)として位置付けるとした。教育課程上で、各教科と異なる新たな枠組みとして、学校教育法施行規則に位置付けることが適切としたことも記された。目標に関しては、道徳性の育成に向けて、重視すべき具体的な資質・能力とは何かを明確化するとした。さらに、発達段階を踏まえて計画的な指導を充実する観点から規定する必要があるとしたことも加えられた。また、検定教科書の導入や評価の基本的な考え方にも触れられている。3は、小・中学校だけではなく、就学前幼児期、高校、特別支援学校などにおける道徳教育についても一貫した理念に基づいて改善を図っていくこととした。²⁾

その後、平成27年3月27日に文部科学省は、学校教育法施行規則の一部を改訂する省令と小・中学校学習指導要領を告示した。これによって、道徳の時間を、「特別の教科 道徳」として制度上位置付け、その充実を図ることとなった。¹⁰⁾

3. 道徳教育をめざす子ども

「はじめに」でも述べたが、いじめの実数は、減少傾向にあるが、不登校や暴力事件は増加傾向にある。わが国の一般的な子どもの現状を考えたとき、子どもを取り巻く環境の変化、家庭や地域社会の教育力の低下、体験の減少等の中、生命尊重の心の不十分さ、感情の乏しさ、基本的な生活習慣の未確立、規範意識の低下、人間関係を形成する力の低下など、子どもの心の活力が弱っている傾向がある。

実際の学校現場では、

- ・自分の思いどおりにならなければ、すぐにかっとして相手に暴言を吐いたり、暴力をふるったりする、いわゆる「きれる子ども」の増加。
- ・みんなもしている、自分さえよければという、自己中心的思考行動をとる子どもの増加
- ・子どもらしい夢や希望をもつことができない、自己の存在感や有能感など、自尊感情が豊かでない子どもの増加など、今こそ、教育現場では、家庭や地域と連携しながら、子どもたちが自分にはこんなことができる、自分はこんなことで役立っているなどの実感を持ち、自己の課題や目標に向かって努力することにより、生きることへの自信や意欲、学ぼうとする気持ちを引き出すことができる道徳教育の実践が急務である。

道徳教育は、子どもの人間形成のすべての面に関わるものであり、その展開は、道徳の時間を要として、学校の全教育活動を通して行われるものである。道徳教育を進めるにあたって、学校はこれまでの取り組みを踏まえ、道徳教育を今後の学校づくりの中核に据え、その目標と内容を明確にし、常に教育活動を点検し、改善していく必要がある。⁴⁾

そのためには、次にあげる、

- ・「道徳教育」を学校の緊急課題として把握し、有効な対応策を策定し、学校、家庭、地域が一体となって取り組みを進める。
 - ・「道徳教育」を学校づくりの中核に据え、その目標と内容を明確にし、現在の教育活動の見直し・点検を図り、新たな教育の展開をめざす。
- を実践課題として取り組む必要がある。

しかし、実際の学校現場においては、根強く残るいじめの実態や不登校問題など、日々の授業や学級経営が困難になっている現状も見られる。これらの問題行動の状況や要因を多面的に把握し、子どもの心を豊かにする道徳の授業を工夫したり、子どもたちのための魅力と特色のある学校づくりの取り組みを家庭や地域と連携したりしながら、進めていくことが急務である。

まず、学校として全教職員が、いじめやいじめの芽は

どこの学年や学級にでも起こり得るという、問題意識と危機感をもって何事にも向き合う。個に応じた指導、楽しくよくわかる授業の創造、子ども同士や子どもと教師の対話のある学級・学年・学校づくり、保護者や地域の関係者との信頼関係づくりなどの構築を図る。

また、不登校には、いじめ等友人関係をめぐる問題、教師との関係をめぐる問題、学習の不振などの「学校生活に起因するもの」、親子関係をめぐる問題、家庭生活の急激な変質化などの「家庭生活に起因するもの」、本人の遊びや非行、無気力、不安・情緒の不安定などの「本人に起因するもの」や「その他、社会的な要因」などがある。不登校は、自己を確立していく過程でどの子どもにも起こり得るものであるとの認識に立ち、その実態やきっかけ・要因などを踏まえた上で、子ども理解と子どものよさを認め励ますことを基本とした指導を学校・家庭・関係機関等との連携・協力のもとに進めていくことが大切である。

4. 道徳教育を進める教師像

子どもが幼いほど、生き方のモデルとしての教師の役割が大きくなる。一人一人の教師の生き方、考え方、行動の仕方が、子ども達に大きな影響を与える。教師自身が日々心を磨き、自己の生活を振り返り、自らの道徳実践力を高める努力を惜しまない教師でなければならない。

そういった普段の自己実践を踏まえ、日々子ども達に関わる教師として、子ども理解を基軸に子ども達の自己実現や自分探しの旅への支援者としての立場を強く自覚する必要がある。特に子ども達とのふれあいは、全教育活動を通じて行われるものであり、学級担任は、相談活動を生かした学級経営に努め、子ども理解への深化とともに、子ども達の豊かな人間関係の醸成に努めることが重要である。

子ども達は、自分の感情や意志や欲求を分かりやすい言葉で表現し、周りの人によく分かってもらうことが、豊かな人間関係をつくったり、その中で自己実現が図れたりすることに気づくのである。このような表現力・コミュニケーション能力を育てるためには、教師自身が常に子ども達に心を開いて向き合い、建前の話ではなく、本音で子ども達と語り合える関係の構築が大切である。

道徳の時間を要として日々の学級における教育活動を行い、子どもの道徳性を養うような学級経営を行うことが、担任としての教師の責務である。

5. 道徳教育を推進する学校像

子ども達の心をより一層耕し、豊かで確かな生きる力を育むためには、子ども達が安心して楽しく学べる学校

づくりが求められる。学級の道徳の時間での学びが深まる、道徳的な心情、判断力、意欲や態度を育む学校教育活動の実践が求められる。

例えば、学校全体での体験活動を重視する教育活動の展開である。さまざまな自然体験や社会体験、観察・実験、飼育・栽培、見学や調査、発表や討論、ものづくり体験や伝統文化等のふれあいを学校行事に積極的に取り入れることが、子ども達の道徳性を育成する。さらに、校内外の自然環境の活用や、校内の緑化を推進することも重要である。

また、学校全体として、よく分かる授業づくりの取り組みの推進である。子ども達の心の成長には、何よりも日々の授業が楽しく・わかる・できるという喜びに満ち溢れた環境でなければならない。子ども達が、仲間とともに学ぶ喜びを日々積み上げていくことができる授業が日々行われている空気が必要である。指導方法や評価方法の工夫・改善に努め、子ども達の興味・関心に応じることができるよう、学習課題や内容の選択に日々研究を惜しまない教師の姿勢が求められる。これらの基盤の上に道徳の時間を関連付けることによって、道徳教育と道徳の時間をリンクさせた教育が可能となろう。

服部敬一は、『「特別の教科 道徳」の時間にすべきこと、しなくてよいこと』の中で、いじめの防止を例にして、これらの関係について述べているが、全教育活動における道徳教育としては、・何がよいかわいいか。・何をすべきかすべきでないかを指導し、「特別の教科 道徳」の時間（授業）では、・なぜよいかわいいか。・道徳とは何か。・人間はよりよく生きたいということについて学習すると棲み分けすることが必要であると述べている。³⁾ この考え方は、いじめ以外のいろいろな教育課題を考える上でも参考になる。

学校が、子どもの生活の場である家庭・地域との連携をどう図っていくかは、道徳教育を推進する上でとても重要な要素である。学校と家庭・地域が双方向からさまざまなことを子ども達に発信したり、共有したりして互いに連携・協力しあうことが子ども達の道徳性を豊かにする。

今日の都市化、少子化、核家族化などの影響は、子ども達の道徳性の育成に少なからず阻害要因になっている。このような中で、子ども達に豊かな心を育み、道徳性を高め、道徳実践力を確かなものにしていくために、より一層、学校と家庭・地域との強力な連携が求められる。そして、相互の協力体制を図りながら、それぞれの教育機能を十分に発揮できるように、学校としての働きかけが重要である。

本研究の目的は、教科化に応えられる道徳教育と道徳

の時間の在り方やその関連性を探求することである。そのために、(1) 体験活動を生かした道徳教育と道徳の時間の関連付け、(2) 資料の特性を生かした道徳の時間の工夫の2つの側面からアプローチする。

II 体験活動を生かした特色ある道徳教育

1. 体験活動の教育的意義

幼・少年期における体験は、その人の人格形成やその後の生き方に大きな影響を与えることは、これまでも重要視され、ここで改めて言うまでもない。学校のみならず、家庭・地域社会、そして社会全体が一体となって多様な体験活動の機会を提供することで、大きな教育効果を生み出す。

近年、集団宿泊活動や校外活動、ボランティア活動、地域の方々との交流活動や委員会活動、栽培活動や飼育活動など、子どもたちが直に行う実践的な教育活動はほとんどの学校で取り組まれている。その背景には、平成11年に公表された生涯学習審議会の調査報告¹²⁾で、子どもたちの生活体験・社会体験が豊かな子どもほど道徳観・正義感が充実しているという調査結果からも裏付けられている。また、いじめの原因の一つとして、子どもたちの生活体験の不足も挙げられる。子どもたちは、体験を通して実際に見たり聞いたり触れたりして感じたことは五感を刺激し、その記憶は長く残るものである。しかし、単に経験したというだけでは「楽しかった」「つらかった」など、個人的な感情で終わるということにもなりかねない。実際に体験した事実やそこで感じたこと、考えたことを意図的・計画的に学習活動につなげることで、初めて教育効果へと昇華するのである。

とりわけ「道徳の時間」との関連を図ることは、体験活動をより確かなものとする大きな手立てである。また、例えば体験活動後の道徳の時間においては、体験活動の時間に道徳的価値を含んだ場面に接しているので、その道徳的価値への補充・深化・統合が図りやすく、新たな気づきや自分と違う感じ方・考え方との出会い、そして自己の生き方につなげていく時間に一層醸成されるものと考えられる。

2. 体験活動を道徳の時間と関連づけるための整理

実際には、体験活動と道徳の時間を関連付けるには、一つの大きな単元として組み立てることが必要である。つまり、指導する道徳的価値を中核に置き、そしてそれに伴う体験活動にはどのようなものが考えられるのか、道徳の時間をどのように配置するのかといった構想を練る必要がある。そのためには、「道徳の時間」の年間指導計

画を作成するに際して、ねらいとする道徳的価値に見合う体験活動を掘り起こし、相互にどのように位置づけるかを吟味しておくことが大切である。以下に組み立てていく上での留意すべき視点について挙げる。

- ・体験活動をどのような教育活動に位置づけるのか。例えば、総合的な学習や特別活動（学級活動、学校行事）、そして各教科など。
- ・体験活動のねらいを明確に立てているか。そして道徳的価値とどう結びついているのか。
- ・体験活動と関連する道徳の時間の指導の計画を立てているのか。
- ・関連する道徳の時間は、1時間なのか複数時間なのか。
- ・短期間に渡って関連付けるのか、長期間に渡って関連付けるものなのか。

このように計画の段階で、これらの要件を満たした上で初めて実施に取り掛かれるものである。

次に、体験活動を事前・事後に実施し、道徳の時間とどのように関連づけるかについて、実践例を挙げて具体的に示す。

3. 実践例について

例1：伝統野菜の栽培活動を通じて、食育との関連をもつことで、感謝の気持ちを育てる（5年生）

(1) 児童の実態とねらいとする価値について

子どもたちは、自分たちの生活が自分だけでは成立しないことを理解している。しかし、具体的にどう支えられているのかは分からず、その恩恵に報いようとする気持ちは希薄である。そこで、総合的な学習の時間「大阪の食文化について調べよう」での吹田くわいを植える体験活動や、農家の方のお話を聞かせていただくことをきっかけとして、直接お世話になった方々を改めて見つめ直し、自分たちのためにどれだけのことをしてくださっているのかに気づくようにしたい。そして、心から感謝する気持ちを持てるようにし、自分たちのできることで感謝の念を表わそうとする意識を高めたいと考えた。

また、伝統野菜を栽培することで、郷土に対する関心を深め、郷土愛へもつなげることを意識した。ほかにも「生命尊重」や「勤労」といった道徳的価値との関連も視野に入れて取り組む。

(2) 体験活動との関連

事前指導として、5月に3年生とともに、大阪の伝統野菜である吹田くわいを植える活動を行い、作物を育てる楽しさや難しさを感じられるようにしたいと考えた。

表1 吹田クワイの栽培活動と道徳の時間との関係

	道徳の時間	体験学習
5月		吹田くわいを植えよう (総合的な学習の時間)
7月	太陽の味	吹田くわい農家の方のお話 (総合的な学習の時間)
1月	おかげさまで	吹田くわいの収穫 → くわいの天ぷらづくり (総合的な学習の時間) (総合的な学習の時間)

また、7月には吹田くわい農家の方をお招きし、くわいなどの農作物を育てる上での苦労ややりがいについて話を伺い、自分たちの体験と重ね合わせるようにした。

事後指導として、育てた吹田くわいを収穫し、天ぷらを作ることで、ものづくりの苦労やかかわった方々への感謝の気持ちを思い起こすことができるようにした。

(3) 実践を終えて

5月の体験活動では、子どもたちは「育つまでが楽し

み」「水やりや草ぬきを忘れないようにしたい」といった感想を持った。また、7月の農家の方のお話を聞いて、子どもたちは「わたしたちの食べているものには多くの手間がかかっていることが分かった」「農家の人たちにありがとうと思った」といった感想を書き綴っていた。

その後、道徳の時間で、「太陽の味」「おかげさまで」(日本文教出版『あすをみつめて』5 2-(5))を資料とし、次のようなねらいで取り組んだ。なお、指導案は略案を提示している。

本時のねらい：自分の生活が多くのの人々によって成り立っていることに気づき、生活を支えてくれている人や社会に感謝し、それに応えようとする。(◎…中心発問)

学 習 活 動	主な発問と予想される子どもたちの反応	指導上の留意点
1. 平野さんの話を聞いて思ったことを話し合う。	○ 平野さんの話を聞いてどうでしたか。 ・わたしたちの食べ物には多くの手間がかかっていることが分かった。 ・農家の人たちにありがとうと思った。	・「ありがとう」と思うものの、行動に移すのは難しいという気持ちをおさえる。
2. 資料「おかげさまで」を読んで話し合う。	○ 「ほく」の気持ちを考えながら聞きましょう。	
①おばあちゃんの「おかげさまで」を聞いて	○ おばあちゃんの「おかげさまで」の口癖を「ほく」が大げさに思うのはなぜでしょう。 ・みんなに言っている。 ・誰もかれもからお世話を受けてはいない。	・おばあちゃんの「おかげさまで」を批判的に見る「ほく」の様子をとらえるようにする。
②お父さんの話を聞いて	○ お父さんの話を聞いて、「ほく」は「おかげさま」についてどう考えたでしょう。 ・食事だけじゃない(電気・ガス・水道)。 ・生活が大勢の人に支えられている。	・多くの人の支えによって自分たちの生活が成り立っていることに気づくようにする。
③おばあちゃんが毎朝公園に行くわけを聞いて	◎ お父さんからおばあちゃんが毎朝公園に行く理由を聞いて、「ほく」はどんなことを考えたでしょう。 ・お返しを行動に移せることはすごい。 ・おばあちゃんもみんなを支えている。	・行動に移せることの素晴らしさに気づくようにする。
④おばあちゃんが電話口で話すのを聞いて	○ 電話口で話すおばあちゃんの弾んだ声を聞いた「ほく」の気持ちを考えましょう。 ・おばあちゃんはすごいなあ。 ・おばあちゃん自身がうれしそう。	・おばあちゃんを敬う気持ちを持つ「ほく」に気づくようにする。

3. 本時の感想をワークシートに書く。	○ 「おかげさま」を伝えたい人はまわりにいますか。 今日の気づきを書きましょう。 ・ 両親に。 ・ 友だちに。	・ 本時で気づいた価値を明確に意識するようにする。
4. 教師の話を聞く。		・ 身近な状況を紹介することで、実践への意欲づけをする。

本時の感想から、子どもたちは「いつも仕事で大変なのに家のことをしてくれていてありがとう」「安全に登下校ができるように地域の方々にもっとお礼を伝えたい」などという意見をもっていた。

また、1月の収穫活動や天ぷらづくりにより、食べられるまでの手間を思い出し、自分たちが普段口にしている食材も同じように手間をかけて育てられていることを実感することができた。

体験活動と道徳の時間の関連を意識することで、これまで以上に実感を伴った生き生きとした感情や気づきを交流することにつながった。そして、「種をまく→育てる→収穫する→食する」といった一連の体験活動を通して理解できたことや感じたことを交流することで、体験活動はより一層生きたものとなり、子どもたちの道徳的実践力を確かなものにつなげることができた。

例2：あいさつ週間を通して（全校 5年生）

（1）児童の実態について

本校では、毎年、児童会の児童が中心となって、校内の各所に立ち、あいさつを盛り上げていく「あいさつ週間」を年に3回行っている。さらに、その活動と並行し、「生活ふりかえり週間」を活用し、自身の生活に活かせるようにしている。そのため、登下校時には元気な声が聞こえている。しかし、振り返りカードの結果を見ると、

高学年になるにつれて、「自分からあいさつをすることができる」「元よくあいさつすることができる」と答える児童は少なくなっている。

（2）具体的な取り組み

○学校での「あいさつ運動」の取り組み

本校では、地区ごとに分かれて1年生から6年生まで集団登校を行っている。そのため、高学年の児童が責任をもって安全に登校できるように活動をしている。しかし、あいさつに関しては、高学年の児童もまだ不十分な面も見られる。そこで、まず日々のあいさつを大切にしたいと考えた。「あいさつ週間」では、校内のポイントに児童会の子どもたちが立ち、あいさつを盛り上げるほかに、クラスごとにめあてを考え、玄関に掲示することで意識できるようにした。また、振り返りカードを活用することにより、あいさつ活動に意欲的に取り組めるようにした。

○「地域見守り隊」の方との取り組み

「地域見守り隊」の方に学校に来ていただき、5年生の児童と交流を行う。5年生が家庭科で学習したお茶を入れて、日々の感謝の気持ちを伝え、「地域見守り隊」の方の思いや、苦勞を聞く。また、簡単な自己紹介ゲームも行い、交流の輪が深まるようにしたい。そして、その交

表2 あいさつ運動と道徳の時間との関係

	道徳の時間	教育活動全体
5月	あいさつ運動 【2－（1）礼儀】	あいさつ週間①（児童会活動）
6月		生活ふりかえり週間 ↓
10月		あいさつ週間②（児童会活動）
11月	父の仕事 【4－（4）勤労・奉仕】	「地域見守り隊」の方と交流会をしよう（家庭科・総合的な学習の時間） ↓
1月		あいさつ運動③（児童会活動）

流を活かし、これからのあいさつの活動に活かしていきたい。

(3) 体験活動との関連

道徳の時間の事例としては、5年生において、あいさつ運動（日本文教出版 生きる力5 2-(1)）を資料として行った。

本時の感想から、子どもたちは「これからは、気持ちの良いあいさつをしたい」「見守り隊の方々にも元気な声であいさつをしたい」などという意見をもったことがわかった。

(4) 実践を終えて

学習指導要領によると、「道徳教育を進めるに当たっては、学校や学級内の人間関係や環境を整えるとともに、学校の道徳教育の指導内容が児童の日常生活に生かされるようにする必要がある。また、道徳の時間の授業を公開したり、授業の実施や地域教材の開発や活用などに、保護者や地域の人々の積極的な参加や協力を得たりする

など、家庭や地域社会との共通理解を深め、相互の連携を図るよう配慮する必要がある。」とある。

この「あいさつ活動」を活かした取り組みは、保護者や地域の人々の積極的な参加や協力を得ることができた。さらに、「地域見守り隊」の方々との交流を行うことで、真心をもって接することや、社会に奉仕することの大切さを感じられるようにしたいと考える。

4. 今後の方向性

現行の学習指導要領では改善の基本方針の一つに、社会体験や自然体験等の体験活動を重視することが示されている。この方針は、教科化されても不変である。各学校においては、各教科、特別活動、総合的な学習の時間等において様々な体験活動が求められている。道徳教育においても、そのような体験活動との関連を意識して道徳の時間の指導を行うことは、道徳的实践力を一層高める指導として効果的であり、それが求められていることは間違いない。つまりは、体験活動が十分に活かされるような道徳の時間のあり方を工夫することが期待される

本時のねらい：時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接する。(©…中心発問)

学 習 活 動	主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点
1. どのようなときにあいさつをするか考える。	○あいさつは、どのようなときにしますか。 ・朝 ・帰るとき ・人に会ったとき	○あいさつについて、考えるきっかけにする。
2. 資料を読んで話し合う。 ①あいさつのおかげで、教室が明るくなってきたとき ②明るくあいさつを続ける道夫さんを見たとき ③「ぼく」が反省したとき ④「あいさつ」運動がもり上がったとき	○「あいさつの声が聞かれるようになり教室が明るくなってきた」と感じたぼくはどんなことを思いましたか。 ・教室が明るくなった。 ・あいさつをすることは大切だ。 ○「明るくあいさつを続ける道夫さんを見たとき」ぼくはどんなことを思いましたか。 ・あいさつを続けるのはすごいな。 ・目立ちたがり屋と言われているのはおかしいな。 ○「ぼく」は今回の出来事を通してどんなことを思ったでしょう。 ・あいさつをすることは、気持ちがいい。 ・道夫さんに悪いことをしたな。 ○なぜ、「あいさつ」運動がもり上がったのでしょうか。 ・あいさつをすると気持ちがよいということに気づいたから。	○あいさつをすることで、クラスの雰囲気がよくなってきたことをおさえる。 ○道夫さんをのけ者にする理由があいさつであることの理不尽さを感じながら、助けることもできない「ぼく」の心情をおさえる。 ○道夫さんに悪いことをした、という思いだけで考えが終わることが無いように、補助発問を行う。 ○役割演技を行い、気持ちのいいあいさつについて、学級全体で共有できるようにする。
3. 本時の感想を書く	○今日の気づきを書きましょう。	○机間指導を行う。
4. 教師の説話		○身近な状況を紹介することで、実践への意欲づけをする。

のである。最後に、体験活動との関連を深めるために、留意すべき点についても述べておく。

- (1) 道徳の時間と他の教育活動で行われる体験活動を関連付けた年間指導計画を立てることが必須である。その上で、道徳の時間をどのように位置づけるかが大切であり、実践例にも挙げたが、関連図として示すことができればより分かりやすく、実用的である。
- (2) 指導する側からすれば、道徳の時間のねらいがあるのは当然であるが、体験活動にも活動自体のねらいがある。それ故に、一方が主であり、他方は従であるという関係にはない。例えば、道徳の時間に学んだ道徳的価値を体験活動において実践させるのではなく、実践できるような場を意図的・計画的に設定することが大切である。また同様に、体験活動の後に道徳の時間を行う場合は、その体験をもとにした振り返りを行うなど、指導者が意図的に想起させて関連付けることも必要である。

Ⅲ. 資料の特性を生かした道徳の時間の工夫

1. 道徳の時間の問題点とその改善に向けて

道徳の時間については、子どもが本気になって取り組む優れた実践が多く見られる一方で、形式化した指導や徳目を教え込むにとどまるような指導が、問題点としてよく挙げられる。また、学年が上がるにつれて児童生徒の受け止めがよくないとの声もある。文部科学省は、平成 27 年 3 月の学習指導要領の一部改訂にあたり、「道徳教育の抜本的改善・充実」⁸⁾として、道徳の時間の課題として次の 3 点を挙げている。

- ① 「道徳の時間」は、各教科等に比べて軽視されがち
- ② 読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導
- ③ 発達の段階などを十分に踏まえず、児童生徒に望ましいと思われる分かりきったことを言わせたり書かせたりする授業

そこで、これらの克服のために、道徳科に検定教科書を導入し、内容について、いじめの問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものに改善することや、問題解決的な学習や体験的な学習などを取り入れることなどを挙げている。また、「考え、議論する」道徳科への転換により児童生徒の道徳性を育むとしている。文部科学省が、スローガンとして「読み物道徳」から「考え、議論する」アクティブ・ラーニング（能動的学修）の授業を提唱すると、スローガンや言葉だけが先行して、単純に読み物を活用した道徳授業はよくないの

で、対立する課題を設定して子どもに討論させればよいと捉えたり、「問題解決的な」という言葉を生活上の問題解決と短絡的に捉えて授業を行ったりすると、本来の学習指導要領改訂の意図とは全く異なる授業が行われるのではないかという危惧もある。むしろ、これまでに積み上げられてきた道徳授業のよい実践に学び、「読み物」を活用しながらも、「考える道徳」をめざし、必要に応じて「議論する道徳」を採り入れるべきではないかと考える。道徳の時間において「考える授業」をすることは常に求められるが、議論することはどの学年においても、また、どのような資料を使うときでも常に必要であるとは言えない。議論することは、特に判断力を高めるような授業において求められる。また、アクティブ・ラーニングは、実際に小学校の教科・領域では既によく行われている。道徳の時間においては、討議形式で進めたり、ペアやグループによる話し合いを取り入れたりするなどの工夫も行っている。また、ネームプレートの活用や、同じ考えをもつ子ども同士が集まるように座席の移動を行うなど一人一人の立場を明確にした話し合いを行うこともある。さらに、役割演技や動作化、ペープサートといった体験的な学習を取り入れていることもある。従って、アクティブ・ラーニングは、小学校においては、教師対子どもの問答だけによって進められる授業の改善と受け止めるべきであり、むしろ中学校以上の学校にこそより求められる考え方である。

平成 27 年 7 月に公示された小学校学習指導要領解説書には、5 問題解決的な学習など多様な方法を取り入れた指導の項の冒頭に（1）問題解決的な学習の工夫として、道徳科における問題とは道徳的価値に根差した問題であり、単なる日常生活の諸事象とは異なる。と明記してある。

それならば、犬が好きか猫が好きかといった個人の好みの問題や、どうしたら廊下を走ることを少なくできるかとか、給食の割れ食器を減らすことができるかといった生活指導上・給食指導上の問題等は、道徳科（道徳の時間）で扱う問題とは言えない。

柴原弘志¹¹⁾は、道徳科における問題の例として、次の 4 つを挙げている。

- ① 道徳的価値が実現されていないことに起因する問題（必要な道徳的価値への気づきが欠けている問題等を含む）
- ② 道徳的価値についての理解の不十分さに起因する問題
- ③ 道徳的価値を実現しようとする自分とそうでない自分とが葛藤する問題

④ 複数の道徳的価値のどちらを優先すべきかという問題

そのような考えに基づいて考えれば、これまでに使われてきた小学校の資料のかなりのものが、この4つの問題のうちの①～③のどれかを含んでおり、また、「問題解決的学習」という用語を使っていなくても、そのような問題に焦点を当てて問いかけられるような授業が行われてきたことを再発見することに気付く。柴原が指摘したような分類の視点で資料を挙げると下記のようなものである。

- ① 「かぼちゃのつる」(低)「どんどん橋のできごと」
「雨のバスでいりゅうしょで」(中)
② 「なかよしだから」「お母さんのせいきゅうしょ」
(中)「うばわれた自由」(高)
③ 「月の峰のおおかみ」(中)「多かったおつり」(高)
(低・中・高は、小学校の学年)

今後このような視点を意識して資料を読み解いていくことが、授業改善に資することになると考える。また、発問としては、
「ここではどんなことが問題になっていますか。」
「主人公は、何と何で迷っていますか。」
といった問題を意識化するような発問や、
「こんなときには、どうしたらよいと考えますか。」
といった問題解決を促す発問が求められよう。しかし、よいとわかっていてもできない。悪いと知っていてもしてしまうような人間の弱さや、その人物が置かれた状況場面を押さえておかないと、授業での発言と実際の行動の間にズレができることが考えられる。

2. 資料のタイプの違いをふまえた展開の工夫

道徳の授業展開は、資料をもとにして「考える」ことが中心になる。資料は、読み物が主流であるが、場面絵・紙芝居やビデオ・DVDなどの映像資料もある。また、これまでも道徳の資料を「知見資料」「葛藤資料」「感動資料」等と分類して、それに応じた授業展開が必要であるという授業理論があるが、筆者は、研究を進めるうちに、表3のようにそれらとは違う資料の分類の仕方があり、むしろ、資料のタイプによって有効な発問や授業展開があるのではないかと考えてきた。

- ① 主人公が、(助言者・援助者の助けを得て、あるいは良心に従って行動し)成長・変容するもの
道徳の教材(資料)として典型的なストーリーである。いわゆる主人公が出会いによってあるいは、自分の良心に従って行動し、成長・変容するいわゆる Before⇒After の作品であるが、このような資料では、主人公の転機や行為のもとになる考えに着眼して、中心発問をつくるとよいのではないか。
- ② 場の変化をもたらす人間の姿が描かれたもの
人が機転をきかして行動することによって、場の変化をもたらす資料である。このような資料では、そのような場面に焦点を当てて中心発問をつくるとよいのではないか。
- ③ 主人公が、成長・変容したとは言えないもの
いわゆる失敗談や主人公は成長していないのに、問題はそれなりの解決をするものである。このような資料で授業をするときには、主人公だけでなく、主人公以外の人物の視点から発問したり、失敗談では、失敗の理由を考えさせたりすることが必要である。
- ④ 人の言動や行動の選択が感動を与えることを主としたもの

表3 資料のタイプによる分類

1. 転機や場の変化が描かれている資料	2. 転機が描かれていない資料
① 主人公が、(a 助言者・援助者の助けを得て、b 良心に従って行動し)成長・変容するもの。 (例) a 「はしの上のおおかみ」(低) 「まどガラスと魚」(中) b 「わきだした水」(低) 「多かったおつり」(高)	③ 主人公が、成長・変容したとは言えないもの (例) 「おおかみが来た」(低) 「金のおの」(低) 「ノートのひこうき」(低) 「ロバを売りに行く親子」(中)
② 場の変化をもたらす人間の姿が描かれたもの (例) 「フィンガーボール」(中) 「彫刻師グリュッペロ」(中)	④ 人の言動や行動の選択が感動を与えることを主としたもの (例) 「リストの弟子」(高) 「手品師」(高)

主人公は、もとよりよくできた人物であるため、感動はあるが、主人公が成長したり、変容したりするという作品ではない。このような資料では、資料がもっている感動を大事にしつつも、本時のねらいに迫るためには中心発問に工夫が必要である。

当然のことながら、これらの分類に当てはまらない資料もあるが、ねらいに迫るためには中心発問に工夫が必要であることには変わらない。一つ一つの資料ごとに効果的な授業展開や本質に迫ることのできる発問があろうが、資料を類型化することによって、それらに共通した授業展開・視点・発問を考えることができるのではないかな。

3. 教材（資料）分析のポイントと発問

藤永芳純は、平成 25 年 2 月 1 日に寝屋川市立石津小学校で行われた研究授業後の指導講評において、道徳の資料分析する上で押さえておくべきポイントは、次の 5 点であると述べている。この 5 点を押さえておくことは、有効な研究方法であり、それをもとにしてよい発問が可能となろう。

1. 主人公はだれか
道徳的変容を遂げたのは
2. 道徳的論点（内容項目）は何か
変容がある場合、前後の情報はるか
3. 山場（場面・ことば・行動）はどこか
変容が起きたところ
4. 助言者・援助者（きっかけ）は何か、誰か
自分の良心か、他者か
5. 発問（内面的資質を育てるために）
心（こころ）を問う

そこで、この資料分析の方法に当てはめて、上記の 4 つのパターンの資料のうち代表的なものを読み解いて、本時のねらいと発問を考えてみた。また、発問の工夫としては、子どもの意識の流れを予想し、それに沿った発問や考える必然性のある発問、自由な思考を促す発問を心がけることが大切である。また、資料のストーリーを知っているだけではわからず、考えることによってのみ新たな気付きがあるような発問を中心発問にすることが大切である。なお、中心発問は、後述する発問例においては、◎と太字で表している。

①－a 資料「はしの上のおおかみ」（「わたしたちのどうとく」1・2年）

内容項目 2－（2）親切

自分より弱い動物（うさぎたち）に対して橋の上で通せんぼのいじわるをし、自分よりも強い動物（くま）に対してはこびへつらっていたおおかみが、くまの親切に心を打たれて、親切の喜びに目覚め、改心する。

本時のねらい：資料「はしの上のおおかみ」のおおかみの変容を通して、親切にすると気持ちよいことに気付かせる。（導入）

「『えへん、へん。』は、どんな時に言う言葉ですか。」

（展開）

「うさぎやきつねを追い返しているとき、おおかみはどんなことを思っていますか。」

「くまを見て、あわてておじぎをしたのはなぜですか。」

「おおかみは、くまの後ろ姿をながめながらどんなことを考えていましたか。」

◎「うさぎをおろしたあと、『えへん、へん。』と言ったとき、おおかみは、どんなことを考えていますか。」

（終末）

（A 案）「友達にしてもらってうれしかったことを発表しましょう。」

（B 案）「おおかみが、前より、ずっといい気持ちになったのはなぜか書きましょう。」

①－b 資料「わきだした みず」（日本文教出版『いきるちから』1年）

内容項目 2－（2）親切

天気が続いたので、池の水が少なくなり、魚たちが心配していたところ、泉に住んでいるかにかが通りかかり、魚を心配して池から泉の方へ穴を掘り始めた。途中に大きな岩があって回り道したが、かにはがんばって三日も掘り続け、泉の水を池に流し入れた。

本時のねらい：資料「わきだした みず」を通して、身近な人に対して目を向け、困っている人には温かい心で接し、親切にしようとする。

(導入)

「泉と池の違いを知っていますか。池にすむ生き物たちのことを想像してみましょう。」

(展開)

「苦しんでいる魚さんたちを見て、かにさんはどう思ったのでしょうか。」

◎「**疲れて体が重かったのに、どうしてかにさんは掘り続けたのでしょうか。**」

「魚さんたちが喜ぶのを見て、かにさんは、どんな気持ちだったのでしょうか。」

「今日の学習を振り返って、かにさんに手紙を書きましょう。」

(終末)

「先生の話聞きましょう。」(親切にしたことについて指導者が話す。)

② 資料「フィンガーボール」(4年生の道徳 文溪堂)

内容項目2-(1) 礼儀

女王様が、外国のお客様をもてなすためにパーティを開いた。ところが、お客様は、フィンガーボールで手を洗う習慣を知らず、その水を飲んでしまった。すると、女王様は、自分もフィンガーボールの水を飲んだ。

本時のねらい：資料「フィンガーボール」の女王様の行動を通して、本当の礼儀とは何かについて考えを深める。

(導入)

「あいさつすることは、どうして大切なのですか。」

(展開)

「お客様は、なぜ、フィンガーボールの水を飲んだのでしょうか。」

「女王様は、なぜ、フィンガーボールの水を飲んだのでしょうか。」

◎「**もし、女王様がフィンガーボールの水で手を洗われたとしたら、お客は、どう感じたのでしょうか。**」

「生きた礼儀とは、どんな礼儀のことでしょうか。」

(終末)

「女王様の態度から、あなたは、どんなことを学びますか。」

③ 資料「おおかみがきた」(どうとく1 みんななかよく 東京書籍)

内容項目1-(4) 正直

羊飼いの男の子が、退屈しのぎに「おおかみが来た！」とうそをついて騒ぎを起こした。大人たちはだまされて助けに来るが、うそということがわかる。それから、男の子は、繰り返し同じうそをついたので、本当におおかみが現れた時には、大人たちは信用せず、誰も助けに来てくれなかった。

本時のねらい：資料「おおかみがきた」を通して、うそのこわさについて考えを深める。

(導入)

「うそをつくことは、なぜいけないのですか。」

(展開)

「男の子は、ひつじの番の仕事のことをどう思っていますか。」

「どうして、『おおかみが来た。』と言ったのでしょうか。」

「村の人が来たのを見て、男の子はどう思ったでしょう。」

「どうして、また同じうそを何度もついたのでしょう。」

「本当におおかみがきたのに、なぜ村の人は助けに来てくれなかったのでしょうか。」

「村の人の考えは、どう変わっていきましたか。(最初・次・最後)」

◎「**うそは、どんなところがこわいでしょう。**」

(終末)

「うそ ついちゃった」(「わたしたちのどうとく1・2年」)を聞く。

- ④ 資料「手品師」『小学校 道德の指導資料とその利用1』文部省
内容項目1-(4)正直・誠実

あるところに、腕はいいがあまり売れない手品師がいた。その日のパンを買うのもやっとだったが、大劇場のステージに立てる日を夢見て、腕を磨いていた。ある日、手品師はしょんぼりと道にしゃがみこんでいる小さな男の子に出会った。男の子はお父さんが死んだ後、お母さんが働きに出て、ずっと帰ってこないと言った。手品師が手品を見せると、男の子はすっかり元気になり、手品師は明日もまた手品を見せてあげてくれることを約束した。ところが、その日の夜、友人から電話があり、大劇場に出演のチャンスがあるから今晚すぐに出発して欲しいという。手品師は、迷ったが、明日は大切な約束があるからと友人の誘いをきっぱりと断った。翌日、手品師はたった一人のお客様である男の子の前で、次々と素晴らしい手品を演じてみせた。

本時のねらい：資料「手品師」の主人公手品師が、男の子との約束を守ったことで失わなかったものは何かを考えることを通して、誠実に生きようとする心を育てる。

(導入)

「約束を守るのはなぜ大切ですか。」(他人に対して・自分に対して)

(展開)

「手品師はどうして貧しいのですか。」

「手品師は、どうしてお金も取らずに男の子に手品を見せたのですか。」

「手品師が男の子との約束を守ることによって失ったものは何でしょう。」

↑ 対比

◎「手品師が男の子との約束を守ることによって失わなかったものは何でしょう。」

「男の子の前で手品をしながら手品師はどんなことを考えていますか。」

(終末)

(A案)「『手品師』を読んで、気付いたことや考えたことを書きましょう。」

(B案)「『約束』という歌を聴きましょう。」(宮沢章二作詞 中田喜直作曲)

なお、この対比のパターンは、資料「命のビザ(杉原千畝)」等、人が人生における決断をするときに、それによって失うものと失わないもの(得るもの等)を考えさせるときにも活用できる。

ここで採り上げた5つの資料の内容項目は、視点1(対自分)と2(対人)のものであり、教科との関連よりも、むしろ日常生活における行動との関連が深い。例えば、「はしの上のおおかみ」は、いじめの予防という意味でも価値ある資料である。いじめは、初期段階においていじわるという形で現れることがよく見られる。また、授業には、指導者である教師の人間観が反映する。資料中の動物は擬人化された人間の姿であり、おおかみは単なるいじわるなおおかみではなく、親切の喜びを知らないおおかみであるという見方が大切である。それは、子ども観にも通じる。いじわるの面白さにとりつかれてしまったおおかみが、親切にされる嬉しさを知り、さらに自ら進んで親切をする喜びに目覚めていく姿に焦点を当てていきたい。その過程では、おおかみに転機をもたらしたいものと考えさせることが、より高い生き方につながると考えられる。導入や終末の段階では、日常生活の中にある

いじわるな行動や親切な行動と資料を結び付けて考えさせることによって、補充・深化・統合を図ることが大切である。

4. 道德の時間の今後の方向性

これまで、教師が資料を握っている場合には、葛藤場面等で分割して与えて続きを考えさせるような授業展開が可能であったが、今後、道德が教科化されて、教科書が子どもに配布されるようになると、本の好きな子どもは自宅で教科書を読んで、そのストーリーを既に知っている可能性がある。従って、授業においては、ストーリーを知っているだけではわからないことを考えさせることに主眼を置いた発問することが求められよう。また、国語の教材は、子ども自身が読むことによって国語の学力をつけることが教科の目的でもあるが、道德の読み物資料は、授業の導入段階の後に、教師が読み聞かせて子ど

もは資料を目で追いかけて内容理解をたやすくすることが望ましい。子どもの国語力の差が道徳の授業で出ないようにすることが求められる。

道徳の時間は、全教育活動で行われている道徳教育の「要」の役割をもつとされている。この役割を果たすためには、資料分析を深めるとともに、発問の工夫や学習活動の活性化のための様々な工夫をして授業を構築するとともに、1時間の指導がどのように全教育活動で行われている道徳教育を補充・深化・統合しているのか、位置づけを明らかにすることが重要となる。その積み重ねが、道徳の時間の指導の充実につながると考える。

本研究においては、小学校の授業をもとに考察したが、これは、中学校においてもあてはまる考え方である。

Ⅳ まとめ

いじめの問題等への対応が発端となって議論が行われ、平成27年3月に道徳の教科化を核とした学習指導要領の一部改訂が行われた。本研究の目的は、道徳教育と道徳の時間の在り方やその関連性を探求することである。

道徳教育推進のためには、道徳の時間と他の教育活動、とりわけ体験活動を関連付けた年間指導計画を立てることが必須である。その上で、道徳の時間をどのように位置づけるかが大切であり、関連図として示すことによって分かりやすくなり、また実用的である。

道徳の時間は、全教育活動で行われている道徳教育の「要」の役割をもつが、この役割を果たすためには、資料分析を深めるとともに、1時間の指導がどのように全教育活動で行われている道徳教育を補充・深化・統合して

いるのか、位置づけを明らかにすることが重要となる。また、資料のタイプによって有効な指導の在り方も異なるので、発問等様々な工夫をして授業を構築し、子どもにとって新たな発見のある道徳の時間にすることが求められる。

参考・引用文献

- (1) 中央教育審議会(1998)「新しい時代を拓く心を育てるために－次世代を育てる心を失う危機－」中央教育審議会(答申)
- (2) 中央教育審議会(2014)「道徳に係る教育課程の改善策等について」中央教育審議会(答申)
- (3) 服部敬一(2015)『「特別の教科 道徳」の時間にすべきこと、しなくてよいこと』道徳教育方法研究第20号 77～79 日本道徳教育方法学会
- (4) 俵谷好一(2001)『チャンスの翼－教育課程編成の実際－』20～27 大阪市立小学校長会 教育改革特別委員会 大阪市小学校教育研究会
- (5) 共同通信大阪社会部(2013)『大津中2 いじめ自殺：学校はなぜ目を背けたのか』PHP 新書
- (6) 教育再生実行会議(2013)「いじめの問題等への対応について」の提言 首相官邸
- (7) 文部科学省(2013)「いじめ防止対策推進法」文部科学省
- (8) 「道徳教育の抜本的改善・充実」(2015) 文部科学省
- (9) 文部科学省編(2014)「平成25年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」文部科学省
- (10) 文部科学省(2015)「学校教育法施行規則の一部を改訂する省令」小学校学習指導要領 文部科学省
- (11) 柴原弘志(2015)「道徳授業における「問題解決的な学習」とは何か」月刊誌「道徳教育」9月号 4～7 明治図書
- (12) 生涯学習審議会(1999)「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ－「青少年の[生きる力]をはぐくむ地域社会の環境の充実方策について」－(答申)」文部科学省

Promoting a More Appealing Moral Education

: Moral Education that Implements Experiential Activities and a System with a Period for Moral Education that Utilizes the Special Traits of Materials

Koichi Hyotani* Yoshimasa Fujita* Hiroyuki Kato** Yusuke Murakami***

* *Osaka University of Comprehensive Children Education*

** *Osaka Shiritsu Ogimachi Elementary School*

*** *Osaka Shiritsu Sanadayama Elementary School*

The purpose of this research is to investigate the relation between moral education as a curriculum and the time spent on moral education.

In order to promote moral education, it is necessary to create a year-long lesson plan that associates a period for moral education with other educational activities, especially experiential activities. In addition, prioritization of a period for moral education holds importance, and graphic display of the subject is both easy to understand and practical.

A period for moral education acts as the keystone for moral education taught in all educational activities. To fulfill this role, it is vital to deepen data analysis and reveal how a one hour lesson supplements, deepens, and integrates moral education into the rest of educational activities. Furthermore, because various types of effective teaching styles exist based on the type of materials, it is imperative to construct a class using various schemes such as posing questions in order to make a period for moral education a new discovery for children.

Key words : moral education, a period for moral education, experiential activities, relation between the household and region, curriculumization